

「衆議院選挙」

2017年10月24日

衆議院選挙結果は、自民党は過半数を超え、自民・公明で3分の2議席を獲得したので、自民党の圧勝と言わざるを得ない。安倍政権は信任された訳である。私としては残念至極で、これだけ国民不在の政治をされても、まだ信任しますかと怒りを超え、悲しくなる。安倍晋三首相の政治姿勢と言葉は全く信頼できない。安保関連法案が国会に上程されていない時に、米国議会で、自衛隊の海外派遣を認める集団的自衛権を行使できる法案を通すと約束した。国会や国民を無視し、米国に媚びる姿勢に啞然とした。また、五輪・パラリンピックを誘致するために、福島原発事故は「アンダーコントロール」と言い放った。原発事故で苦悩している人々を全く無視した発言に強い怒りを覚えた。国会では「特定秘密法」「安保関連法」「共謀罪法」を民主的手法とはかけ離れた強行採決で成立させた。この3法は国民を監視し、戦争を想定した、これからの日本のあり方を決定する最も危険な法である。安倍首相は「戦後レジームからの脱却」と言うが、その内容は戦前の明治憲法時代に立ち戻ることである。憲法を改定し、民主主義とは真逆な国家主義的政治を目論んでいる。戦前の教育勅語を教える森友学園に賛同する姿勢を見せ、行政は忖度してか、同学園の小学校建設に便宜を図った。加計学園の獣医学部建設は、友だちへの優遇と見られている。権力の私物化として批判された。野党は「森友・加計問題」の究明のための臨時国会の開催を求めていたが、国会開催の冒頭で、解散した。解散すべき理由はない。「森友・加計問題」の隠蔽であり、北朝鮮の危機を煽って「国難突破解散」などと言い、取ってつけたような、教育の無償化の選挙目当ての公約を掲げた。

それでも安倍政治は信任された。しかし、積極的な信任ではない。小池百合子氏は安倍一強政治を打破すると「希望の党」を立ち上げた。都知事選を制し、「都民ファースト」のキャッチフレーズで都議選も勝利した勢いに乗ろうとしたのであろう。民進党は反自民の4党共闘を主張していたが、臆面もなく希望の党の策に乗った。希望の党はしょせん自民党の補完勢力である。民進党議員は希望の党に入党できた人と排除された人が出て、事実上解党した。小池氏の「私ファースト」は見抜かれ、見事に失速した。政治家たちの政治理念は希薄で、議員になりたい姿がクローズアップされた。野党は分裂し、自民党に有利に働いただけである。市民から新党を作れと押された枝野幸男氏は急遽「立憲民主党」を立ち上げた。今回の選挙で、自民党に対抗する勢力として市民権を得た。出来立ての党にもかかわらず、50議席を超える野党第一党になった。

二大政党による政権交代を可能にしようと小選挙区制になったが、共産党と公明党は固まったままである。日本に二大政党制が生まれるだろうか。中選挙区制で、複数の候補者を選んだ方が国民の意思を吸い上げることができるのではないかと。小選挙区制にしたため、自民党に見られるように、公認を得るために首相の意向に沿うようになり、勢い、首相に権力が集まる。民主主義は権力者に権力を集中させないシステムである。

人間は基本的に、今日も昨日のように生きたいと思う保守的な存在である。その保守性が人類の生命を保ってきた。私は、憲法9条が日本に平和をもたらし続けてきたと思っている。この平和を保守したいと「9条の会」の活動に参加してきた。安倍首相は国のあり方を変えようとしている訳で、彼こそが改革派である。今後、立憲民主党が核になって野党が共闘し、権力を規制する立憲主義に立ち、人権を尊重し、戦争をしない平和な国として建ち続けることを、心から願っている。